

広報大洲

きらめき創造 大洲市
—みとめあい ささえあう 肱川流域都市—

2011

No.79

8

大洲



うかい観光再生への取り組み

HIKA

大洲の夏を彩る「うかい」。
今月号では「うかい」の現状と、今後の展望を探ります。

「後世に伝える伝統から進化し続ける地域の宝に」
「新生・うかい」を目指して



『平成のうかい』



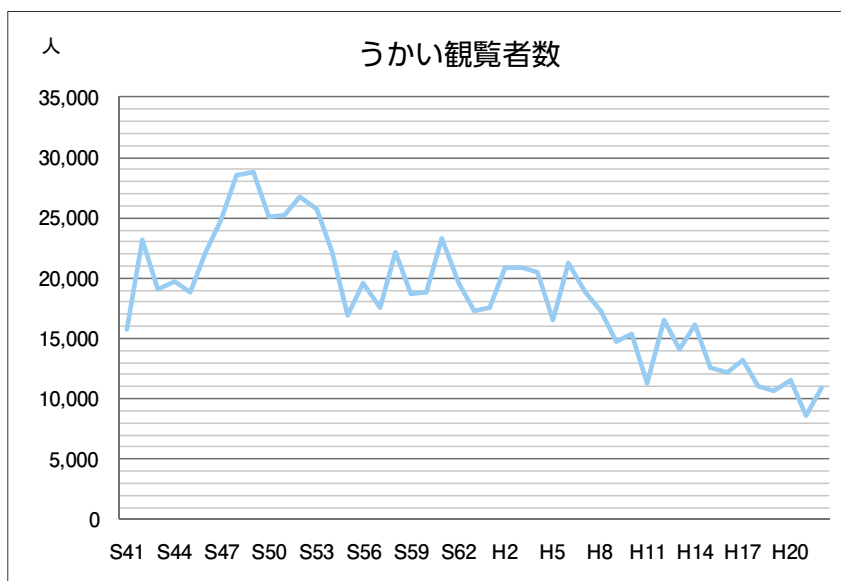
『昭和のうかい』

過去の隆盛



大洲の「うかい」は、昭和32年に水郷大洲の観光の柱として始まりました。夕闇の中からかがり火を燃やしたう船が姿を見せ、う匠が巧みに「う」を操りアユを捕らえるその光景は、多くの観光客を魅了してきました。昭和41年にNHK朝の連続テレビドラマ「おはなはん」が放送されたから、観覧者数は順調に伸び、最盛期の昭和49年には、2万8000人を超えるまでに人気が高まりました。

現在では、う船3隻、遊覧船47隻を数え、大洲のうかいは「日本3大うかい」の一つとしてその名を馳せていますが、し好の多様化、ニーズの変化などから、観覧者数は減少傾向にあります。





このような中、大洲の伝統である「うかい」を次世代に引き継ぐために、新たな試みが始まりました。子どもやお年寄り、観光客が気軽に「うかい」を体験できるように、平成22年から「昼うかい」が取り入れられ、1368人の観光客が肱川遊覧を楽しみました。

肱川の「昼うかい」は、岐阜県木曾川、広島県馬洗川、山口県錦川に続く4番目の取り組みで、観光客の増加が期待されています。

UKAI

伝統の再興



また、平成23年度からは、うかい観光事業の実態調査、分析などを行い、うかい観光事業再生計画の作成やうかい観光の旅行商品化の検討などが行われています。

さらに、「大洲うかい船頭おもてなし研修」を実施して、船頭やうかい登録店のマナーアップ、知識や技術の向上、接遇などを優先事項と位置づけ、その改善に向けて、積極的に取り組んでいます。

未来への飛躍



う匠
井上 ^{としかず}利和 さん

今年の「うかい」から、う匠としてデビューしました。それまでは市内で会社員をしていましたが、う匠頭から強く勧められ、う匠の練習を始めたのがきっかけでした。

一番難しいのは「う」の扱いで、気を抜くとかみつかれることもあります。「う」を自在に操ることも大事ですが、「う」と信頼関係が築けるように、飼育小屋にも足を運びたいと思っています。

う匠の仕事は、配慮が欠かせません。手綱の操作、う船を操作する船頭との連携、遊覧船との安全な距離の確保など、全てがそろわないと、観光客のみなさんに「うかい」の面白さを十分に伝えることができません。う匠頭のように余裕をもって、この仕事に携われるようになりたいと思います。

「うかい」は、大洲の伝統であり、文化であり、この地域の宝だと思っています。これから多くの人に、「うかい」の魅力を伝えていきます。また、地元のみなさんにもぜひ、「うかい」を見てもらいたいです。



船頭
吉井 ^{つよし}強 さん

船頭を始めて、30年以上が経ちます。経験豊富だと思われるがちですが、中には経験年数が50年近くの船頭もいます。

私は、う船と遊覧船の船頭を兼ねているため、シーズン中はほぼ毎日、川に出ています。う船の船頭は、櫓と竿を持ちっぱなしで操作しなければならず、また、う匠と息を合わせなければならぬため、体力と神経を使います。

また、川の水量が放流などで増減するたびに、川底の状況が変化するため、その変化を常に見極めながら操作することが求められます。お客さんの安全を第一に考え、船を漕いでいます。

これからも「うかい」が脈々と引き継がれるように、今後、若手の育成にも力を入れたいと思っています。そのためには、お客さんが増え、若手に研修の場、おもてなしの場を提供することが大切です。

大洲の「うかい」を守り、育てるため、地元のみなさんにも遊覧船に乗ってもらいたいです。